中学校二年の部　佳作

対象作品／アンネ・フランク著
『アンネの日記』文春文庫

生きる強さ

弘前大学教育学部附属中学校　二川原　遼

『アンネの日記』。それは誰もが知っている日記だ。日記とはもちろん日々の出来事を記録するもののことをいう。そして、それは私には難しいものだった。何度も日記を書いてみようと試みたことがある。だがたいてい私の場合一日か二日くらいでやめてしまう。それに対しアンネは約二年間書き続けたのだった。私にはできないことだ。この日記のどこが世界中の人を感動させたのだろうか。私の頭にそんなことが浮かび上がった。いったいどんな終わり方をしているのだろう。

私にとってこの本は今までにない本だ。ストーリー性がなくめちゃくちゃ。出てくるつまらない話や悪口やペーターの話。アンネの自己中心的な考えに読んでいくうちにどんどんいら立ってきた。でもなぜ世界中でこの日記が読まれているのか。思わず眠くなってしまうような本なのに…。それはやはりユダヤ人が虐殺されるという時代のことがそのまま書かれているからだ。しかし、気にいらないところがあるからといって、生はんかな気持ちで読んでいた私が迂闊だった。確かにつまらないところは正直ある。だが、読み進めていくうちに、だんだん心にずしりとしたものが重なっていった。

まず、アンネは、自由がない世界へ閉じ込められたということに気づかされたことに始まる。外へ出るのもダメ、せきをするのもダメ、話をするのもダメ、動いたらダメ。こんな生活、想像がつくだろうか。私は考えただけで息苦しくなった。ただでさえ長時間じっとしていられない私がじっとしているなんて…、耐えられない。

次に、ありのままの自分を受け入れてくれる、信頼できる相手がキティーだけだったということ。普通日記を書くとき誰かに宛てた手紙のような形で書くだろうか。最初は「親愛なるキティーへ」から始まり、最後に「じゃあまた、アンネより」で終わる日記。日記を読んでいくと気づかされることがある。アンネは家族関係がうまくいってなかったのだ。アンネは文句があるときは皆のことに構わず率直に言ってしまう、本心とはまるで裏腹な行動をとってしまうため、家族皆から非難されていた。家族に相談をすることができないとなればあとは一人だけ。それがキテ

ィー。日記にはいろんなアンネがいた。とても強気なアンネ、さみしがり屋のアンネ、怒り狂ったアンネ、ひとみしりのアンネ。私はどんなアンネがいても良いと思った。いつ収容所に連れていかれるか分からない。いつ家族を失うか分からない。これらのたくさんの悩みを十三歳の少女がずっと抱えているのだ。そして、アンネは変わった。自己中心的なアンネがやることをしっかりこなし、文句があっても口に出さない、そんな少女になった。私は前言を撤回しようと思う。アンネは努力家の強い少女だ。

最後の気の重さは、アンネの未来のない世界に閉じ込められても夢と希望を持ち、毎日を過ごしたということによる。一見逆のように思えるかもしれない。しかし、想像してほしい。一日中ずっと恐怖に襲われ、夜も砲撃や悪夢で眠れない。ユダヤ人たちは戦争のない平和な世界を待ち続けた。しかし、それとは裏腹に死を待つ人々もいた。収容所で苦しい生活を送っている人たちには死が希望だった人がいたと日記で知った。そのことを思うと私は幸せだとアンネは記録している。そして、一九四四年八月一日、火曜日、その日からずっと日記は時が止まっている。これが気の重さの原因だ。その後にどんなことがあったと想像できるだろう。収容所に送られているアンネが私の中には映った。しかも最後の日記にはこれからもがんばっていこうという前向きなアンネがいた。何か文章を書いて消してできた空白。私にはただの空白にしか過ぎなかった。でも日記はその空白で何かを訴えているのではないかと思う。この日記は私に何をもたらしたのか。それは計り知れないほどたくさんある。私はアンネの生き方に心を打たれた。アンネは大きく成長しているのにも関わらず、自分はどうだろうかと見直すと胸が苦しかった。生きる強さ、責任感、夢や希望。この『アンネの日記』は誰もが知っている有名な本ではなく今、こうして生きている私に感謝させる大切なものをたくさん教えてくれる大事な本になった。